

# 『古スコッツ語辞典』の成立 —スコッツ語辞書編纂の歴史と思想—

LD9913 米山優子

## 論文要旨

スコットランドの言語状況が論じられる時、そこに登場するのはスコットランド標準英語(Scottish Standard English)、スコットランド・ゲール語(Scottish Gaelic)、スコッツ語(Scots)である。スコットランド・ゲール語の話者数は、2001年の統計によるとスコットランドの人口の1.16%(約58,000人)に過ぎない。その話者が居住するのは主にハイランド(Highlands)、特に島嶼部である。スコッツ語が話される地域は主にローランド(Lowlands)で、公式の話者数の統計はとられていないが、いくつかの調査ではスコットランドの人口の約30%(約170万人)がスコッツ語を話すとされる。古英語と共通の素地をもつスコッツ語は、スコットランドで話される英語の地域変種(regional variety)と認識される場合がある。一方で、スコッツ語自体が更に細かい地域変種に分かれていることから、独自の歴史を持った「言語」(language)とみなされる場合もある。2000年、UK政府は「地域言語または少数言語のための欧州憲章」に署名し、2001年にこれを批准した。この憲章でスコッツ語は、ウェールズ語とスコットランド・ゲール語などと共に「使用されることが少ない言語」(“lesser used languages”)の一つと認められている。但し、ウェールズ語とスコットランド・ゲール語が公共生活での使用を促進する対象となっているのに対して、スコッツ語はその前の段階に留まっている。ウェールズ語とスコットランド・ゲール語は、ゲルマン系の英語とは言語系統の異なるケルト系言語である。英語との違いを一つの要因として言語復興を進めてきた両言語の場合と比較すると、スコッツ語は英語との近似性ゆえに抱える問題がより複雑化している。従来、スコットランドの人々は土着のことばに対する意識が希薄であると指摘されてきたが、それに加えて優勢言語である英語との違いを明確に示す言語的特徴が弱いことは、スコッツ語の振興策にとって不利となってきた。

本稿が検討したのは、このようなスコッツ語の弱点が、逆の方向に転換される結果となった一つの取り組みである。独立した言語ではなく英語の一変種とみなされたために、スコッツ語史を網羅する記録が生み出された。それが、『古スコッツ語辞典』(*The Dictionary of the Older Scottish Tongue*, 1937-2002; 以下、*DOST*と記す)と『スコティッシュ・ナショナル・ディクショナリー』(*The Scottish National Dictionary*, 1931-1976; 以下、*SND*と記す)である。これらの辞書は、『オックスフォード英語辞典』(*The Oxford English Dictionary*, 1884-1928; 以下、*OED*と記す)の第3代編集主幹ウィリアム・アレグザンダー・クレイギー(Sir William Alexander Craigie, 1867-1957)によって立案された。*DOST*と*SND*は、収録語の初出年代によって区分される。*DOST*には12世紀から1700年までの文献に現れた古スコッツ語(Older Scots)が、*SND*には1700年以降の近代スコッツ語(Modern Scots)が*OED*と同じ歴史的原則(historical principles)に基づいて収録されている。ある言語が歴史的辞書の作成を検討されるということは、その言語に長い変遷の歴史があり、十分な文献が残されていることの証明になる。本稿は、スコッツ語を扱った歴史的辞書のうち、2002年に全12巻が完成した*DOST*に焦点を当てた。創案者クレイギーの存在の大きさと、スコッツ語が言語として機能する特性を十分に保持していた時代の記録であるという点を重視して、論考の対象を*DOST*に絞った。また、*DOST*が複数の編集主幹の手を経て完成した点に着目し、80年以上も引き継がれてきた辞書作成への理念がどのようなものなのか考察した。

第1章では、スコッツ語ということばがどのような歴史を辿り、どのような言語内の特徴を持っているのかについて述べた。スコッツ語の歴史を概観すると共に、スコッツ語に対する意識の変遷を追い、言語としてのスコッツ語の位置付けがなぜ困難なのか検討した。

第2章以降、スコッツ語辞書が中心的な主題となる。第2章では、スコッツ語の先駆的な

辞書について述べた。特に、「歴史的原則」の原型を呈した辞書として重要なジョン・ジェイミソン(John Jamieson, 1759-1838)の『スコットランド語語源辞典』(*An Etymological Dictionary of the Scottish Language*, 1808)について詳しく扱った。スコッツ語辞書の歴史を通して、スコッツ語辞書の取り組みに向けられてきた編纂者の理念を論じた。歴史的な枠組みにおいてDOSTがどのような位置を占めているのか、先行辞書とどのような関係にあるのかについて、また、DOSTと関連の強いOEDや方言辞典について述べた。

第3章は、DOSTの編纂史の前半を扱った。DOSTが計画された経緯と作成の目的、収録語及び対象とする引証文献の範囲について述べた。実際の編集作業の工程を概観し、DOSTの収録語項目を例示して、記述内容について説明した。また、スコッツ語の言語外的な特徴を通して、古スコッツ語と近代スコッツ語の捉え方の違いを考察した。DOSTと関連するスコッツ語研究について言及し、DOSTが様々なプロジェクトと結びついた広がりのある取り組みであることを確認した。

第4章は、DOSTの編纂史の後半を扱った。第3章で説明した編集作業と平行して、出版の段階に入ったDOSTが、どのようにして完成に至ったのか考察した。主に、編集方針の変更や編集部の運営について述べた。

第5章はDOSTの編集主幹の中から、クレイギーとエイトキンについて論じた。編集主幹の存在の大きさについては前述したが、特にこの2人の重要性には力点を置くべきであると考えた。スコッツ語の捉え方や辞書編纂に対する取り組み方などについて、言語学者としての彼らの思想と関連させて述べた。第3章、第4章、第5章は、編集部の公文書及び未公開の著作を資料とした本稿の中心となる部分である。

第6章は、DOSTの作成を取り巻く社会的側面を考察した。DOSTの編集部がどのように運営されてきたのかについて、スコットランド行政府(*Scottish Executive*)、スコットランド芸術評議会(*Scottish Arts Council*)などによる助成の状況を考察した。また、スコットランドの言語政策に言及しながら、特に1980年代以降顕著になってきたスコッツ語に関する動きについて述べた。それぞれの動きの主体となっているものが何か、何を目的とし、どのような成果を収めているのか分析した。

終章では、DOSTの成立を通して、スコッツ語が抱える諸問題が何らかの打開策を見出せるのか、その可能性を検討した。もともとDOSTの計画は学術的な目的意識に端を発するものだが、これほど壮大な辞書の作成が、その言語の状況に全く変化を及ぼさないと考えにくい。DOST完成後の新たな取り組みについて述べると共に、スコッツ語とスコティッシュ・ナショナリズムとの関係について考えた。

DOSTの編纂方法や運営方法には、他の歴史的辞書と共通する点がある。編集員には対象とする言語以外にも幅広い専門知識が求められるが、DOSTの場合は、古スコッツ語及び関連する言語の語彙や文法に関する知識に加えて、歴史や文学に関する知識、古スコッツ語の正書法に関する知識などが必要となる。また、緻密な編纂作業には編集員自身の直観的な「語感」が不可欠である。このような資質を持ち合わせ、DOSTの編集部にも最も長く奉職したエイトキン(Adam Jack Aitken, 1921-98)は、特に重要な人物である。長年にわたるDOSTの取り組みは、(1)計画時から一貫してきた作成の理念、(2)編集員の専門知識と語感に基づく編纂技術、(3)編集作業を継続させるための運営組織によって完結した。エイトキンはこれらの全てに深く関わり、編集員との連携関係を築くなど、あらゆる面でDOST編集部の牽引役であった。辞書作成の現場に限らず、常にスコッツ語研究の世界で存在感を發揮したことも、彼のDOSTへの多大な貢献を印象付けている。DOST作成に向けた全ての動きが、クレイギーの「新しい辞書計画」から始まったのは確かである。彼が定めたDOSTの目的は、作業の継続が危機に瀕した時期でさえ、完成時まで揺るぎないものであった。変更が見られたのは、見出し語や語源の記載、収録語の対象範囲、意味分析の際の主眼点など一部の編集方法と、人事、運営組織、出版社など編集作業を取り巻く状況である。クレイギーの架けた梁に、エイトキンをはじめとする後継者たちは耐久性のすぐれた屋根を取り付け、DOSTを完成に導いた。完成したDOSTは、もはやクレイギー一人の力による辞書とは言えず、特にエ

イトキンの貢献は、クレイギーに勝るとも劣らない。

スコットランドにおいて、スコッツ語辞書の取り組みは地道な活動が結実した代表例の一つと言える。しかし、初期の頃はスコッツ語で書かれた文学遺産を再評価する面が主となり、日常生活で積極的にスコッツ語を使用することを奨励する面が弱かった。特に *DOST* が完成した後、スコッツ語を日常的に使用できる環境の整備も、スコッツ語辞書の編纂に携わる人々の主要な任務とされている。様々な要因から、発音、文法、意味など言語内の性質が変化してきたのと同様に、社会におけるスコッツ語の受け止め方も移り変わってきた。古スコッツ語と近代スコッツ語の違いが、単に使用年代だけではないことを理解しておかなければならない。*DOST* の膨大な用例の出典には、公文書、叙事詩、年代記、戯曲など様々な分野の文献が含まれる。このことは、古スコッツ語が幅広い領域に用いられる言語であったことを明示しているが、特に18世紀を境にスコッツ語の使用域は縮小する。古スコッツ語を現代によみがえらせようとするのが、ことばと社会の結びつきを無視することにつながりうるのは何故か、近代スコッツ語が「方言」以上ではあるが「言語」未満のことばとして、「半言語」(“Halbsprache”)と判断されるのは何故か、その理由をもう一度よく考える必要がある。スコッツ語への理解を深める土壌を整えずに、社会的地位、語彙、言語習得などを推進させるとしたら、そこには理想のスコッツ語像を一人歩きさせる危険が伴う。スコッツ語が負のイメージを払拭するためには、古スコッツ語の文学遺産と共に、庶民のことばとして語り継がれてきた近代スコッツ語の特質を再評価することが求められる。スコッツ語と英語の言語内的な近似性に拘泥するのではなく、スコッツ語でしか表現できない文化的側面を再認識することで、スコッツ語の土着性に対する肯定的な態度が生まれる。*DOST* がその利用者に促すことができるのは、ナショナル・ランゲージとして幅広い用途に用いられていた中世のスコッツ語の記録を通して、スコットランド文化の独自性を理解することである。一般の人々のスコッツ語に対する肯定的な態度は、スコッツ語の伝統を継承していくためには不可欠である。スコッツ語の「歴史性」(“historicity”)を生かしてこのような態度を奨励することは、これまで指摘されてきたスコッツ語の弱点を補う主要因と言える。

*OED* の記述を補完するために計画されたスコッツ語辞書は当初の目的を超え、スコッツ語が「生きていることば」であることを何よりも明確に証明している。辞書の改訂は、そのことばが社会で使用され、変化しているからこそ求められる。多様な形態で利用できるようになった21世紀のスコッツ語辞書は、スコッツ語の過去と現在を写し出す「鏡」として、また、その時代に即したスコッツ語の「鑑」として、「スコッツ語に度々欠如してきた社会的体面と威信を与える」可能性を持っているのである。